

論文

霜田史光研究落穂拾い（その2）

竹 長 吉 正

Supplements to the Research Work of Shiko SHIMODA（Ⅱ）

TAKENAGA Yoshimasa

キーワード：戯曲「血みどろ月」、霜田史光の戯曲、雑誌『真砂』、
童話「額を打たれた西行法師」、霜田史光の童話、
実録、浦和の竹栽培、小野田益三

全体の構成

- (8) 戯曲「血みどろ月」とその周辺
- (9) 史光の戯曲作品リスト及び雑誌『真砂』掲載作品リスト
- (10) 童話「額を打たれた西行法師」の典拠と人物名の訂正

(8) 戯曲「血みどろ月」とその周辺

霜田史光の戯曲「血みどろ月」は、未発表の遺作である。この作品の存在については拙著『評伝 霜田史光』（日本図書センター 2003年9月）で、若干ふれたことがある（注 同書167, 186ページ）。

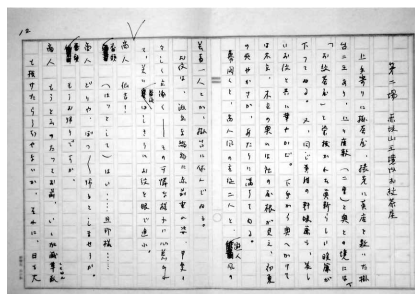
その後、この作品の存在を教えてくれた田島義雄が亡くなり、この作品の行方が気になっていた。田島が「ちっぽけ劇場」として使っていた霜田静志旧宅を解体することになり、霜田光一氏から連絡があり、霜田静志の遺品を見るために東京・西荻窪の家に伺った。そして、遺品の中から霜田史光の遺作「血みどろ月」の原稿（*写真①a①b）を見ることができた。

まず、原稿の一番上に別の紙があり、それには霜田静志の妻きよ（旧姓、武正）の筆で「平ちゃんの遺稿」と記されていた。そして、B4判400字詰め原稿用紙全四十九枚に黒インクで、作品が書かれていた。

以下、それを掲載する（*原文は旧漢字旧仮名遣い。新漢字新仮名遣いに改めた）。



写真①a



写真①b

血みどろ月 四場

霜田 史光

[時と場所] —— 寛永元年五月十五日、
朝より夜にかけて、江戸城中及び城下に於ける事
件。

[主要人物] ——

内田平太郎（旗本、二十五才）

米倉伝五郎（旗本、二十四才）

めつけやく
目付役

太田相模守（内田や米倉の先輩）

旗本（甲、乙、丙）

商人と従僕（お紋茶屋での）

助八 （米倉家の若党）

もん
お紋 （十九才）

ちか
お近 （お紋の姉）

伝五郎の母（六十二、三才）

内田作十郎（平太郎の叔父）

みのきち
弥之吉 （町の浮浪人）

[その他] ——

江戸詰所における旗本大勢。

平太郎の朋友林田甚八、井上学、山並源十郎。

伝五郎の用人彦兵衛老人（七十三才）

米倉家の家人添島太兵衛、青木大八郎。ちゅうげん仲間、こもの小者、女中ら
数名。

内田方の戦闘員多数。

第一場 江戸城中旗本詰所

式日総登場の朝、皆々麻上下長袴に威儀を正して、將軍拝謁の時を待っている。追々と参着する者もあって、広間は幾つものグループに、話の花が咲く。

内田平太郎もその中に見出される。彼は若干ながら、頑丈な体格と、利かぬ気の面魂をもって、昂然と構えている。

平太郎（一際、声高く）いや、何人と申しても、着物は上杉家で好んだ四半がよろしい。風雨の節、身を動かすに障りなく、乱軍の中でも勝手がよい。歩騎共に障りあつては充分な動きはできん。

（平太郎の高声に、皆々視線を集める。）

太田 いやいや！（前に進み出て）甲州の勇士は百足の着物で武名を顕している。四半の倍以上もある長い物だが、「甲州百足の着物」とて、敵も味方も道を開いたもののだとは、老人たちの話に聞いている。しからは、手柄は武器に依らず、器量に依るものであらう。

平太郎 やあ、誰かと思ったら、太田相模殿か、もっともらしいお説だが、余人は知らず、この平太郎は百足の着物は愚かなこと、大蛇の着物をもって現われるとも、いっかな道を譲るものではない。

太田 ふん……。

甲 偉いぞ、内田！

乙 その意気！

（この少し前より、米倉伝五郎遅れて人々の間に静かに座る。彼は見るからに柔和な、そして落着きのある、好青年だ。人々は平太郎を冷笑して、舌打ちするやら、囁き交わすやら。）

平太郎（冷笑さるるとも知らず、ますます得意になって手を振り、腰を立て）元来、甲州物には、こけ威しばかりで、一向役に立たぬ物が多い。早い話が、「甲州仕出しの竹束」なぞと大仰にいわれているが、あんな物は卑怯者の一時隠れで、真の武士にとってはお笑い草だ。（と、得意

げに一座を見回す。）

伝五郎 （静かに）内田、今時、戦場話に、そう力み返ることもないではないか、それより何か面白い……。

平八郎 そこにいたか、伝五。なるほど、おぬしのような柔弱武士は戦場のことなど、話すも聞くもいやであろう。

伝五郎 ひどい事を言うな……（と言いながらも笑顔。）

平太郎 何がひどい、当り前の事だ。おぬしなどは朝寝をして、昼頃のこのこ起き出し、食うたり飲んだりして太平楽に肥えるがいい。ありがたい御時世さ。

伝五郎 おぬし、いつもながら口が悪いよ。心安だてに、何と言われても腹は立たんが、竹束についてのお説には、一言挨拶申そう。この伝五郎が甲州出の米倉とは、列座の各々方御存知のところだ。そもそも竹束の根源^{もと}はといえば、我等の曾祖父米倉丹後守が戦場において、機に臨んでの工夫であった。

平太郎 伝五！ 先祖の自賛は置いたがよいぞ。朋友の志ゆえ申し聞かすが、おぬしの先祖米倉丹後守は甘利備前が被官^{ひかん}あがり、その頃甲州にて被官なぞの小身者は士分の数に入らず。在国の隙^{ひま}なぞには筵^{むしろ}を織り、草鞋^{わらじ}を作^{かせ}って稼^{かせ}いだとは、今尚^{いまなお}古老の語り草じゃ。伝五が祖先の丹後守も、その筵織りから思い付いて、戦場に取り寄せ、竹束に作^{ひら}って、押し立てたというは才覚者^{さいかくもの}さ。しかし、開けぬ頃の戦なら、いざ知らず、今後の合戦には竹束や衝立^{ついたて}のようなものを持ち出して箭玉^{やだま}を防ぐような、手ぬるい武士はあるまい。もしありとすれば、役にも立たない腰抜け者さ。あっはっはは……。

太田 内田氏は武芸一点張りかと思ったら、弁舌の方も、なかなかの達人じゃな。だが、弟君をそう、ずけずけと、いじめるものではない。それとも又、昨今、義兄弟の約を解かれたのかな？

平太郎 余計な口出しは無用じゃ。（立ち身になって伝五郎を見下^{みくだ}し）
伝五、そんな眼^{にら}をして、睨むにも当たるまいぞ。拙者はただ真^{まこと}の事を申

しただけだ。それとも、この平太郎が憎いか、言い伏せられて口惜しいか。(伝五郎は顔色を変えて、何やら苦悶の様子。一旦は消え入るばかりに打沈^{うちしず}んだが、やがて決然として、)

伝五郎　内田、おぬしの過言はいつものこと。年来の友情により、このまま、おぬしに花を持たしてやりたいが、事是他門にあらず、我等の先祖が竹束についての嘲^{あざけ}りであってみれば、黙って引込むというわけには参らぬ。

平太郎　大きく出たな、伝五。黙って引込めなければ、のさばり出して言うだけ言ってみい。

(伝五郎、膝ずりして平太郎に近づく。衣紋を正し、扇子^{せんす}を右手に、改まった態度に出たので、列座の皆々、いよいよ真剣となった二人の争いに、静まり返って好奇の眼を向ける。)

太田　(小声に) 米倉、しっかりやれよ。

甲　天下^{おおぼ}の大場だ。

乙　戦場も同じだ。

丙　先祖の恥をそそげ。

(平太郎に睨^{にら}まれて、弥次連引込む。)

伝五郎　同席の皆様方、事々^{ことごと}しく先祖の功を言い立てるも不本意ながら、事ここに至っては申さずには済みませぬ。お耳障りながら、しばらく御容赦下され。そもそも竹束の始まりと申すのは、信州刈屋原の合戦にて、城将太田弥助が精兵に、寄手^{よせて}の手負い夥^{おびただ}しく、信玄公お若き折とて、殊^{こと}の外^{ほか}のお憤^{いきどお}り、人数持、組持の面々に、一手攻めにせよと、激しく下知せらる。大將士卒いずれも命^とを賭して奮戦し、是非共今日中に攻め抜かんと、板垣、甘利、原などの諸勢、交代がかりに暇^{いとま}もなく攻め立てました。然るに敵の弓勢少しも怯^{ひる}まず、ますます激しく箭玉^{やだま}を射かけるに、板垣勢に代って矢面に立った甘利の一隊。その折り、米倉丹後は、まっさきに進み出^いでましたるが、咄嗟^{とっさ}の工夫に、城近き民家より筵^{むしろ}畳を取り寄せ、竹に貫いて士卒の面前に押し立たせ、引くや引くやと城に攻め近

づく。ここにおいて、太田方より射出す矢は、悉く竹束に防ぎ止められる。その間に甘利が手勢、どつとばかりに堀に取り付き、かくて難なく落城いたしました。信玄公はお喜びの余り、刈屋原の落城は全く米倉が竹束ゆえなりと過分のお言葉を下され、それより「米倉が竹束」とか、「甲州仕出しの竹束」とか言われて、諸家争うてこれを用いるようになったのでござりまする。これ即ち、三略に説くところの、柔よく剛を制したる実例というもの。平太郎殿は、米倉が家筋を拙きように申されるなれど、御当家へ軍師役に選ばれし例もあり。五の字の差し物定式なる中に、神君より別段の御詫意を得て、四半の添え差しに米倉軍師と書き記しましたも、おのれが武名を好むゆえではござりませぬ。平太郎殿は我らの先祖を、甘利が被官あがりと辱められましたが、その出身の高卑は論ずるに足らぬこと、今歴々の大身にも、その元不明の家柄さえ幾つもありましょう。また、伝五郎改めて、平太郎殿に問う事がある。おぬしの家名内田の先祖に米倉丹後ほどもにも武名の響いた人があるか、あらば、この場において承りましょう。

平太郎　うむむ……。

伝五郎　（扇子の要尻で畳を叩き）承りましょう、さ、承りましょう。

平太郎　ちえっ、おぬしは談義坊主も立派に勤まる口達者じゃ。柔弱武士には、そのくらいの業も必要であろう。

伝五郎　柔弱武士でも、先祖の恥、おのれの恥を守る術は充分に心得ている。

平太郎　言うたな、伝五っ！

（伝五郎の額に扇子が飛んだが、かわされて背後の人・甲の肩にあたる。）

甲　内田っ、場所柄をわきまえよ。

（折しも、襖がさっと開いて、）

目付役　（声高に）上様がお成りい。皆々、席を改めましょう。

（と言って去るに、皆々慌しく立ち上る。平太郎は促されて立ち上りながら、伝五郎を睨み、）

竹 長 吉 正

平太郎　口先だけ巧者のおぬしに、この場だけは譲ってやるが、追っつけ、互に打ち物取って、本日論争の決をとることに致そうぞ。その時になって、吠え面かいて詫^わび入るなよ。

伝五郎　承知した、何時でも。

（二人は人波に揉まれるようにして、廊下へ出てしまう。ほとんど出尽くした後に、太田と甲乙丙が残る。）

太田　いやどうも、近頃愉快な戦争だった。

甲　米倉は全く見違えた。平常の様子では、弁巧者とも思われなかったが……。

乙　大場の申し開き、実に見事だった。弁舌流れる如くでなあ。

丙　米倉としても、あの場合必死だ。拙者として、あのような場合なら……。

乙　ふん。貴公なぞは、すぐに固くなって、たたけばあ……などと吃^{ども}つて、やがては先祖の墓前に、腹でも切るくらいのものだろう。

太田　あっはっは……。それにしても、内田は味噌^{みそ}をつけたな。

甲　日ごろの心がけが悪いからよ。

丙　だが、このままでは済むまいぜ。

乙　かわいそうに、あったら器量人を一人、殺すことになるか。

（話しながら、四人も出てゆく。）

目付の声　（遠くで）上様お成りい。皆々、席を改めましょう。

（幕）

第二場　赤坂山王境内　お紋茶屋

かみて　上手寄りに掛茶屋、縁先に奠座^{えんざ}を敷いた掛台二三あり。上り座敷と奥との境には、「お紋茶屋」と染め抜かれた真新しい暖簾^{のれん}が下がっている。また、同じ紺^{のき}の軒暖簾も美しいお紋と共に華やかだ。下手から奥へかけては木立、木立の奥には社の屋根が見え、初夏の爽やかさが、あたりに満ちている。

幕が開くと、商人ふうの主従二人と、遊人^{あそびにん}ふうの若者一人とが、掛台に休んでいる。

お紋は派出な縞物に赤前垂れ姿、かいかいしく立ち働く。その可憐^{かれん}な様子^ひに心惹かれて、若い番頭はしきりにお紋を眼で追う。

商人　仙吉！

番頭　（はっとして）はい、旦那様。

商人　どりゃ、ぼつぼつ帰るとしましょうか。

番頭　もうお帰りですか。

商人　もうと言ったってお前、いいかげん、草臥^{くたびれ}も抜けたろうじゃないか。それに、日もだいぶ傾いたし……。 （鳥目^{ちょうもく}を出し）姐^{ねえ}さん、ここへ置きますよ。

お紋　毎度ありがとうございます。（近寄って）あら、こんなに戴^{いただ}きましては……。

商人　何、取っときな。

（商人は番頭を促して去る。）

弥之吉　お紋さん！

（と周囲に人気がないのを見て、変にやさしく呼びかけるが、お紋は聞こえぬふりをしている。）

弥之吉　お紋さんたら！　何をそんなにつんつんするにあ当るめえ。こ
う、お紋さんよ、この腕は、誰のために、こんなになったんだっけなあ。
（立ち上って、ぶらぶらの右腕を振って見せながら、お紋に近づこうと
する。ふと、座敷の上り端に立掛けてある、新しい日傘と女下駄とに眼
をつける。）

弥之吉　また一つ、品物がふえたね、お羨山吹百合の花だ。（と左手で、
日傘^{ひろ}を拵^{うらやまぶき ゆり}げてみる。）

お紋　およしよ、弥之吉さん、姉さんのだから。

弥之吉　ほい、失敗^{しま}った。お近さんが来ているのか。（と奥へ顎をしゃ
くる。）

竹 長 吉 正

お紋 （無言で頷く。）

弥之吉 （日傘を元通りに置きながら）お近さんも、いい所へ嫁いで幸せ者だ。当節あ、侍よりも商人だねえ。

（距ての暖簾を分けて、お紋の姉お近が奥より出て来る。下町風の女房。）

弥之吉 こんにちは。石町の姐御。

お近 （上り端近く座りながら）おや、弥之吉さん、相変らずですね。

しかし、姐御なんて呼ぶのだけは、勘弁して下さいよ、これでも堅気の女房ですからね。

弥之吉 てんづけ、お小言頂戴か。ところで、お母さんの病気は如何です？

お近 わたしがこの前来た時よりは、大変顔色もよくってね。

弥之吉 そりあ、けっこう。お紋さんも病気のお母親さんをかかえて、こうして一生懸命、茶店商いをしているんだから、感心なもんでさ。

お近 感心してくれる気があるなら、あんまり妹をいじめないでくれよ。

弥之吉 冗談言っちゃあいけねえ。いじめられるなあ、こちとらだ。（新しい暖簾や座蒲団などを指し）お店がこんなに綺麗になった代りに、お近さん、おいらの腕が、こんなになってしまったさ。（と振って見せる。）

お近 まあ……。

弥之吉 なんしろ、あつしが、お紋さんにチョイと冗談を言っていたら、いきなり飛び込んで来て、ポカッとここを（左額に手をやる）食らわした上に、大事な右腕をぶらんこにしてしまったんですからね。口惜しいの、口惜しくないのって、泣いても泣き切れねえ程だが、相手は二千五百石の旗本、おまけに腕っ節の強さで評判の内田平太郎と来ちあ、残念ながらおれ達にあ菌が立たねえ。

お近 でも、五十両という大枚の疵代を、せしめたというじゃないかね。

弥之吉 安過ぎらあね。二三度博打場へ行ったら、もうありあしねえ。その五十両にしたところで、本当の話が、お紋さんへの惚れ賃さ。

お紋 弥之吉さん、少し気をつけて物を言っておくれ。わたしあ何も
……。

弥之吉 わかってるよ、わかってるよ。だからさあ、内田の唐変木^{とうへんぼく}が憎
たらしいんだ。おれをまるで恋敵^{こいがたき}かなどのように、ひでえ目にあわしや
がって——そのくせ、^{うぬ}汝は義兄弟だという^{ともだち}朋友の物に^{よこれんぼ}横恋慕……。

お近 しっ……、そんな大きな声をしないでおくれ。久しぶりに会った
んだから、今日はわたしが一杯買うとしましょうよ。さ、これで……。

弥之吉 えっへっへっへえ……。これはどうも、遠慮なく戴きます。あつ
しだって何も、同じ町内に生れた、いわば、あなた方とは^{おさななじみ}幼馴染だ。悪
いようにあ思ってやしねえ。^{かみて}（上手へ入る。）

お近 あの男にも、困ったものね。

お紋 ほんとに、うるさくて！ 姉さん、今日はゆっくりしていても、
いいんでしょう。（と茶を汲^くんで出す。）

お近 陽のあるうちに帰らないと……。お紋ちゃん、わたしは今日、お
前さんに話があって来たのよ。

お紋 あら、姉さん、どんなお話？

お近 米倉様や内田様と、どういう事情^{じきょう}になっているんだえ？

お紋 どうとって……。

お近 隠さず話しておくれ。大事な場面^{と き}なんだから。

お紋 え？

お近 大事な場面だともさ。チョイと踏み外せば女一生を台なしにする
んだからね。わたしあ、危くって見ていられないんだよ。だから、隠さ
ずお話し、相談相手になってあげるから。

お紋 ありがとう、姉さん。（やや躊躇^{ちゅうちよ}した後）いろいろと親切は受け
たけれど、内田様とは、何でもないの。

お近 じゃあ、米倉様とは？

お紋 ………

お近 何でもないとは言い切れないんだね。それはまあ仕方がないとし

竹 長 吉 正

て、内田様の方はどうするつもりなの？

お紋 姉さん、実はあたし、困っているのよ。こんな、お店の飾り物だっ
てお断りしたんですけど、怒って、恐いんですもの。それに米倉様は
この頃ちっとも来て下さらないんです。

お近 どうしてなの？

お紋 それがわからないのよ。もともと米倉様がお一人でちょくちょく
お見えになったのですが、そのうちに内田様をお連れになって、間も
なく、ぱったり足が絶えてしまったのよ。

お近 それから急に、内田様の親切が初まったというわけなのね。

お紋 ええ。

お近 妙ね。お二人は義兄弟だというのに。こりあ、ひょっとすると
……。

お紋 ひょっとすると？

お近 ひょっとするとね、お二人の仲でお前を^{うりかい}売買したのかも知れない
よ。

お紋 まあ、姉さんは……。

お近 近頃の男は、女を、そんなふう to 考えているんだよ。人間という
よりは生きた品物だとね。

(兩人、しばらく無言。)

お近 お紋ちゃん、ところでお前は、内田様のお心に従う気はないのか
え？

お紋 いや！ あたし、どうにも虫が好かないのよ。

お近 では、なぜ、きっぱりお断りしないのさ。

お紋 だって、姉さん、そうすると、米倉様に難儀が掛りそうなんです
もの。

お近 わかった、それでわかった。来る道で聞いて来た話は、ありあ本
当の事に違いない。

お紋 何かあったの、姉さん？

お近 （声を落して頭を近づけ）今朝がた、殿中の詰所でね、内田様と米倉様が、ひどい口論をしたんですとさ。

お紋 まあ！

お近 なんでも、初めは米倉様が、先祖様のことで満座の中で辱められ、次には米倉様の方が弁舌に勝って、内田様を言い伏せてしまったんですと。

お紋 まあ！

お近 お前、この事をどう思う？ 何がために義兄弟ともいわれる仲が、こんなふうに分れて来たか、よく胸に手を置いて考えてごらん。

お紋 姉さん、お二人の喧嘩は口争いだけだったの？

お近 そりゃお前、殿中で刀は抜けないし、その場は内田様が負けたようなものの、このままではすまいという評判さ。

お紋 ああ、お二人の喧嘩の根元は、わたしに違いはない。ああ、姉さん、わたし、どうしたら……。

お近 お紋ちゃん、しっかりしておくれよ。喧嘩の根元がお前さんなら仲直りさせるのもお前さんだ。

お紋 ……（無言。）

お近 よく考えてね。できることなら、間違いを起さぬようにしておくれ。おや、だいぶ、日が暮れてきた。では、お暇、お紋ちゃん、お母さんを頼みますよ。（歩き出しながら）何事も無いようにね。

お紋 はい。お大事に。

（お近が帰った後、お紋は柱にもたれて思案の態。やや、しばし、鳩の声きこゆ。）

お紋 ああ、米倉様は、きっと殺される。弁舌にはお勝ちなされても、打ち物取ってはとてもとても……。何とかしてお助け申すことはできないものかしら。姉さんはああおっしゃったけれど、わたしにはどうしていいか、わからない。（少し間をおいて、）

何はともあれ、一眼お目にかかって……。

竹 長 吉 正

(お紋、襟かき合せて、駆け出そうとする。出^で合^あい頭^{がしら}に、夕闇と共に、ぬつと入り来^{きた}った内田平太郎に突き当る。)

お紋 あれっ！

平太郎 お紋ではないか！

お紋 あ、内田様！

平太郎 今頃、あわててどこへ行く？

お紋 あの……ちょっと……。

平太郎 まあよい。今日は大切な話があってやって来た。そこへお掛け。

お紋 はい。

(お紋は掛け台に、平太郎は座敷の上り端に腰を下ろす。)

平太郎 お紋、拙者如きに、さぞ迷惑であつたろうな。その迷惑も今宵きり……。別れに来たのだ。

お紋 えっ！ 何とおっしゃいます？

平太郎 近々に遠国へ旅立つのでな。おぬしの顔を見るのも今宵限りじゃ。どうせ叶わぬ恋ならば……。

お紋 わたしを斬って……。

平太郎 馬鹿な。

お紋 米倉様を助けて上げて下さいまし。

平太郎 何っ！

お紋 あなた様は、あの人を斬って、立ち退くつもりでございましょう。

平太郎 武士の意気地だ。

お紋 恋の意気地は、ありませぬか？

平太郎 うん、それもある。

お紋 それなら……それなら……内田様！

(お紋はにじり寄って、内田の膝に手を置き) わたしを……わたしを連れてって、下さいまし。

平太郎 何と申す。

お紋 はい、初めてあなた様の男らしさに、お紋は心が動きました。米

倉様のような、あんな柔弱者を手にかけてたとて、何の手柄になりましょう。それよりは、わたしを連れて、どこへなりと……。

平太郎　お紋、お前、それは本気か？

お紋　本気でなくて、どうしましょう。

平太郎　お前は常に病気の母親を楯に、断り通しておったではないか。
その母親をどうする？

お紋　お母さまは姉さんに頼みます。オホホホホ……。

平太郎　お前がその気なら……。

（平太郎、お紋の首をかくえて引き寄せる。ほの暗き夕闇の中に、恋の二人は感激にしばし、言葉もない。）

お紋　（ふと、我に返った如く）おお、暗くなったこと！

（立って、行燈^{あんどん}に灯を入れる。平太郎も座敷に上り、明るい灯の下にお紋と顔を合して、嬉しげに笑う。）

平太郎　人の噂^{うわさ}も七十五日だ。しばらく息を抜いておりあ、米倉との争い事も、世間は忘れてくれるだろう。お前を連れて京大坂でも見物にゆくか。

お紋　京大坂へ？　まあ、嬉しい！　では、その前祝いに、一献^{いっこん}……。

平太郎　おお、頼む。

（お紋、奥に入る。）

平太郎　（ほくそ笑み、）武士の意気地^{なん}も何のそのだ！　あはは、こうと知ったら、殿中で、あんなふうにするのではなかった。しかし、まあ、いいわ。お紋の奴^{やつ}、今頃になって、やっと……。あはははは……。

（この時、平太郎の叔父内田作十郎を先頭に、友人の林田甚八、井上学、山並源十郎など、急ぎ足に押し込んで来る。）

林田　やあ、いた！　いた！

井上　たぶん、この辺に、とぐろを巻いてるだろうと思った。

内田作十郎　平太郎っ！

平太郎　おや、これは叔父上初め……。

竹 長 吉 正

内田作十郎 聞いたぞ、聞いたぞ。

林田 内田、さぞ無念だろうな。

井上 何より間に合ってよかった。貴公一人に斬り込まれたんでは、我々が手持無沙汰になっちまう。

山並 米倉だとして相当人数を集めて待っていることだろうから、如何に武勇の内田でも一人じゃ心許ない。

平太郎 おれは何も、米倉へ斬り込むと決めているわけではないぞ。

林田・井上 (同時に) えっ、何だと！

平太郎 あんな柔弱者の首を取ったところで手柄にもなるまい。それよりは……。

林田・井上・山並 それよりは？

平太郎 うっふふふ……。まあ、そう力むな。あの一件については、いづれ機を見て、伝五郎に武芸の試合を挑み、諸人看視の前で、こっぴどく打ち据えてやればいいのだ。

内田作十郎 平太郎っ、お前はそんな気でいるのか！ 殿中の式日と申せば、天下の大場これにしくものはないぞ。その大場で赤恥を搔かされ、おめおめ引きさがるさえ恥辱なるに、自ら、この勝負を打ち物取って決すると断りながら、来て見れば何じゃ、こんな所に鼻毛を延ばしてけつかる。お前はそれでいいかも知れぬが、一門の恥を何とする。この叔父作十郎が承知でせん。

林田・内田 旗本仲間で、おぬしのことを何と評判しているか知るまい。おれ達はそれを聞いて無念の歯ぎしりで駆けつけたのだ。米倉はあっぱれ者と賞めそやされているが、おぬしのはひつぱやじんに等しと言われているぞ。

平太郎 うむむ……。

作十郎 この期に及んで、臆するとは見下げ果てた奴！ このままに過ぐすにおいては、一門に繋がる俺までが旗本中へ面出しもなり兼ねる。よしっ、貴様が厭なら、俺が代って米倉方へ斬り込んでやる。各々、腕

貸しを頼むぞ。

林田 承知しました。

（この時、奥より、お紋が膳を調えて出て来たが、この場の光景に打たれて尻ごみする。）

井上 （座敷に躍り上ってお紋を捕え、）待て、女！ おじごこやつ
田の決心をにぶらしているんです。

林田 いっそ斬ってしまおうか。

（お紋はふるえて、膳と共に座る。）

作十郎 かどで
首途の血祭り、斬れっ！

林田 おしっ！

（刀を抜いてお紋を斬らんとする。）

平太郎 待て、林田！

林田 何で止める？

平太郎 決心したぞ。これから行って伝五郎の首を取る。

作十郎 おお、決心したか！

山並 それでこそ、内田平太郎だ。

平太郎 （お紋に）お紋、縁あらば、また会おうぞ。武士の道と恋の道は、
両立しないものかのう。お紋、さらばだ！

お紋 （刀の鐙をこじり捕え、）いけません。行ってはいけません。

林田 この阿女っ！

（平手でお紋の頬を打って、お紋にざるぐつわをはめ、柱に縛りつける。）

林田 さあ行こう、内田！

作十郎 誰か一人、先へ走って、屋敷へこの事を注進せい！ そして、
用人の春木にな、急いで一族家人達を集めるように。

山並 よしっ、おれが……。

（下手の方、先へ走る。その後より、皆々、平太郎をよう擁して急ぎ去る。やや、しばし、満月徐々に昇り来る。上手よりかみて弥之吉、酔うた心地にて出て来る。）

竹 長 吉 正

弥之吉 あ、うーい……。月は東に、昴^{ほし}は西に……。いとし殿御は……。あつ、だ、誰でえ？ そんな所で嚇^{おど}かすのは……。あつ、お、お紋さんだ！ これあ、いったい、どうしたこった！

(弥之吉、お紋の縄を解いてやる。)

お紋 ありがとうございます、弥之吉さん。お母さんを頼みますよっ！

(お紋、下手に走り去る。)

弥之吉 えっ！ な、何だって！

(酔い^{うち}の中に狼狽^{うち}する弥之吉。そして、幕。)

第三場 米倉邸内

伝五郎の居間。上手寄りに襖^{かみて}をへだてて仏間がある。下手は濡れ縁^{ふすま}を見せ、庭の植込みも配置よく、背景の土塀の上には、満月が美しくかかっている。

伝五郎とその母、濡れ縁近く座して、月を見いる。

母 秋の月と一口に言うけれど、初夏の月もまた、捨てがたいものですね。

伝五郎 まことに、秋の月は心に沁み入るようでございますが、今頃の月は汚れぬ花のように美しくございます。御覧じませ、空はまるで薄絹を張ったように光り輝いております。空も地も、庭の木々も、そして土塀も、屋根^{いらか}の薨^{いらか}も、ことごとく麻醉の夢に酔うたように、いっさいは青白く濡れております。

母 ほんにねえ……。

伝五郎 母上、伝五郎の眼には今宵の月が未だかつて覚えぬほど、美しく見えますが……。

母 夏には珍しくよく晴れて、一点の雲もなし、風もなし……。

伝五郎 (眩くように) この世のものとも思われぬほどに美しい。こう

して冴え渡った月を見ていると、心の雲もしだいに晴れて来る。

母　心の雲？（向き直って）お前、何か心配事があるのですね。お城から戻って以来、どうも顔色がすぐれぬように見受けました。母一人子一人、心配事があるなら、どうぞこの母にも分けて下さい。

伝五郎　いつに変わぬ母上の優しいお言葉。伝五郎には、この上、お隠し申す事はできません。実は今日、殿中で……。

母　殿中で？（膝、乗り出す。）

伝五郎　内田平太郎と口論いたしました。

母　内田様と？　日頃お仲がよかったではありませんか。

伝五郎　時のはずみとでも申しましょうか、ふとした事がきっかけとなり、双方止むに止まれず満座の中で……。

母　何故お前は、内田様に譲って上げなかったのです？

伝五郎　それが母上、譲りたいにも譲れないことだったのです。内田はわたくしどもの先祖米倉丹後守を罵倒し、竹束を^{けな}貶し、満座の中で辱^{はずかし}めたのです。

母　まあ！　日頃懇意な仲でありながら、どうしてそんな……。

伝五郎　これには思い当たる事もないではありませんが、それは別として、さすがにわたくしも黙っていられず、竹束の由来から、先祖の名誉を守って、必死に弁解致しました。そして、遂に相手^{さか}を逆ねじに、言い伏せてやりました。

母　それから、どうしました？

伝五郎　折^{うえさまはいえつ}りから上様拝謁の時刻が参りましたので、そのまま、もの別れとなりました。

母　あの剛直な内田様が、そのまま引きさがりましたかえ？　そうではありませんまい。

伝五郎　はい、追っつけ打ち物取って、本日口論の決をとると申しました。

母　そうであろう。それでお前、暗い顔をしておったのですね。

竹 長 吉 正

伝五郎 不甲斐なき様^{さま}、お眼にとまって申し訳ありません。

母 いや、先祖の名を辱めず、よう守ってくれました。母からお礼を申します。

(立って仏間の襖を開け、仏壇に灯を入れて、しばし黙^{もくとう}する。代って伝五郎も礼拝する。そして、母子は仏壇の前に向き合って座る。)

母 先祖の名誉を守ってくれたお前、今後も守り通してくれるでしょうね。

伝五郎 おお^お仰せまでもありません。

母 如何なる事が起ころうとも……。

伝五郎 はい、しかし……。

母 お前の心はわかっている。この母のことは、けっして案じるに及ばせぬ。お前は武士の本分を守って、けっして卑怯、未練のないように。

伝五郎 遅かれ早かれ、内田と生死を争わねばなりません。もとより、命は惜しみませぬが、後に残る母上のことを思えば……。

母 この母を氣遣う心があるなら、あく迄、武士の道を守っておくれ。それが先祖に対しても、母に対しても、何よりの孝行じゃ。

伝五郎 分りました。

(兩人しばらく無言。表の方にざわめきが起こり、門扉を激しく叩く音が聞こえる。母子は顔を見合せ、なおも聞き耳を立てている。間もなく若^{わか}党^{かとう}の助八が濡^ぬれ縁^{えい}に現われる。かなり、狼^{てい}狽^いの態。)

助八 殿様っ、殿様っ、大変ですっ！

伝五郎 (静かに仏間を出て、近づきながら) 静かにせい！ 何を慌^{あわ}てとる？

助八 あんまり門前が騒がしいので、潜^{くぐ}り戸を細目に開けてみますと、何百人という人数が、槍や刀の抜き身を連^{つら}ねて、今にも押し込みそうに……。ああ、そうだっけ、これ、これを渡されました。

伝五郎 (書状を受け取って読む。) うむ……。どうせ来るものなら、早い方がいい。これこれ助八、皆の者に、ここへ集まるように申せ。

助八 はいっ。

（助八、転ぶようにして去る。）

伝五郎 母上！ 母上！

母 只今、参ります。

（母は仏前に黙祷していたが、静かに立って襖を開き、伝五郎の傍^{そば}に来て座る。）

母 いよいよ、来ましたね。

伝五郎 おお、母上は最早^{もはや}お察しになりましたか。敵はかなりの多^{おほ}人数をもって、押し寄せた様子でございます。かねてのお諭^{さと}しのとおり、伝五郎は武士らしく、死に花を咲かせるつもりでございますゆえ、母上には彦兵衛を連れて、一刻も早く、裏口より……。

母 いやです！ 如何に女の身でも、老いの身でも、かわいい我が子に斬り死にさせて、なんでこの身一つが逃げられましよう。お前が死ぬ覚悟なら、この母も一緒に連れて行っても。

伝五郎 いえいえ、母上、それではかえって、伝五郎の働きが鈍^{にぶ}ります。どうぞ、この場は落ち延びて下さいまし。

母 お黙り！ わたしは、お前の働きを見るのです。足手まといかも知れませぬが、母にはまた、考えもあります。ちょっとお待ち……。

（母は奥へ去ったが、やがて鎖帷子^{くさりかたびら}をかかえて、もどって来た。）

母 さ、これを着て、母の眼の前で充分に武勇のほどを見せておくれ。

伝五郎 はいっ、母上のお心……（涙を払って）、伝五郎、百倍の勇氣を得ました。

（伝五郎、押し戴^{いた}いて鎖帷子を身に着ける。この時、助八の呼集^{こしゅう}によって、屋敷内の仲間小者女中十数人、添島太兵衛、青木大八郎の二人の家人、老用人彦兵衛とが顔^{そろ}を揃えた。）

伝五郎 （身仕度^{みじたく}しながら）おお、皆集ったか、お前達には気の毒ながら、内田平八郎一味と、今宵只今果たし合いをする。勝敗は時の運とは申せ、相手は多勢^{たぜい}、味方は小勢^{こぜい}、とうてい勝ち目はないと思う。なまじ、忠義

竹 長 吉 正

立てをして二つとない命を失うより、今のうちに、裏木戸から退散したほうがよい。けっして遠慮はいらぬぞ。

彦兵衛 めつそうな、御主人様が斬り死になされるなら、わしととも！

添島 もとより、それがしも同じ覚悟だ。

青木 そうだ。

仲間小者等 (同じように賛成の叫びをあげる。)

伝五郎 皆々の志、ありがたく思うぞ。なら、早う身仕度をととのえて参れ！

一同 はっ！

(どやどやと去る後に、彦兵衛老人だけ残る。)

伝五郎 ご老人、おぬしは？

彦兵衛 死ぬに仕度^{したく}はいりませぬ。

母 おお、たのもし、その言葉……。彦兵衛や！

彦兵衛 はい、奥様。

母 おぬしはよく、半弓^{はんきゅう}の稽古をしておったが、わたしは常々申したでしよう、遊興と心得ず、大事の場合に役立つよう、よくよく工夫して射よ、とね。今こそ、その時が参りました。わたしも助勢いたしますゆえ、共々、敵に当りましょう。

彦兵衛 はい、奥様、物見の窓から。

母 おお、そうじゃ。

(母も彦兵衛も襷^{たすき}をかけ、裾をからげる。伝五郎は充分に身仕度を終って、両刀を腰に、長押^{ながし}の十文字槍を取って鞘^{さや}を払い、りゅうりゅうと素振りをくれる。母も彦兵衛も思わず見惚れる。門前の方、いよいよ騒がしく、舞台は回る。)

第四場 同じく米倉家の門前

(舞台中央より、やや上手寄りに冠木門^{かみで かぶきもん}。更に上手に物見台が土堀の上

へ突き出ている。下手寄り一体は土塀、背景には樹木と屋根。十五日の満月が中天にかかる。

幕開くと、内田平太郎を初め、叔父の作十郎、朋友の林田、井上、山並その他、一族郎党、朋友、小者など多数、槍刀の抜き身を月光に燦めかしつつ、門扉の開くのを待っている態。）

林田　　だいぶ、手間取るようだな。

井上　　屋敷内の、慌てふためく様を見てやりたい。

平太郎　　叔父上、やはり、いきなり踏み込んだ方がよかったように思いますが……。

作十郎　　ばかな、天下の旗本が押し込み夜盗のような真似ができと思うか！

平太郎　　しかし、こうしている間に逃げ出されては水の泡です。

作十郎　　その点は心配ない。この屋敷の周囲は蟻の這い出る隙もないほどに、味方の人数で取り囲んでいる。誰か、裏口へ行って、様子を見て来い！

小者　　はっ！（駆け去る。）

林田　　柔弱者の伝五郎のことだ。果し状を見て、腰でも抜かしおるのではないか。

井上　　あははは……。少しは手応えなくては、せっかく皆して押し出した甲斐がない。

山並　　そう、たかをくくるわけにも行くまいぞ。窮鼠かえって猫を噛む道理もある。いずれにしても油断は大敵だ。

小者　　（駆け戻って）裏口から逃れ出ましたのは女中が五人、仲間が二人だけだそうにございます。

作十郎　　そんな者どもは、どしどし逃がしてやるがいい。

（林田と井上、門扉に近づいて、破れるように叩く。）

井上　　出ろっ、米倉伝五郎っ！

林田　　臆病風に吹かれたかっ！

竹 長 吉 正

平太郎 叔父上、ぐずぐずしては、時が遅れます。さ、いっせいに踏み込みましょう。

作十郎 よしっ、それでは……。

(この時、物見台の窓に、彦兵衛の半身現われ、矢つぎ早に半弓を射かける。傷つく者多数。一団、崩れかかる。)

平太郎 やりおったな、それっ、踏み破れっ！

(十数人、門扉に取りついて、えいやえいやと押す。平太郎、作十郎など、土塀に沿うて矢を避けながら、槍をしごいて待つ。やがて、門扉は内よりどっと左右に開かれ、慌てよろめく敵方を尻目にかけ、左右に十二人の家来を従え、米倉伝五郎勇氣^{あわ}颯爽^{さっそう}として、槍を小脇に現われる。)

伝五郎 参れっ、平太郎っ！ 望みに任せて首を洗って来た。取れるものなら取ってみよ。今こそ柔弱者の戯れ口を、そっくりおぬしに返上するぞ。宝蔵院流^{しゅれん}手練の槍先、味よい所を来て、しゃぶれっ！

平太郎 ほざいたな伝五、我に槍をつけるとは殊勝な振る舞い。年来の交友も今日限り、武道の意地に一命を申し受ける。

伝五郎 何をっ！

平太郎 それっ！

(乱闘又乱闘。伝五郎の勢い猛に、内田方、次第に手負い死人増す。かわるに彦兵衛が必死の半弓、内田方の戦闘力をそぐこと夥しい。平太郎を初め内田方の主なる面々、思い設けぬ伝五郎の働きに、或は驚き或は怖れ、今はただ多勢^{たの}を待みに、散っては寄せ、崩れては集まりつつ、次第に疲労を待つ戦法。米倉方は大方は倒れて、伝五郎ここを必死と孤軍奮闘する。いつの間に來たか、お紋、土塀に身を引っ付けて、恐怖の表情にて乱闘を眺めている。伝五郎、群がる敵を追ひ散らして、ほっと一息。そこへ平太郎、大刀を構えて立ち向う。)

平太郎 伝五郎、おぬしが柔弱者でない証拠をしかと見届けた。さらば、この世に思い残すこともあるまい。

(平太郎の左右に林田、井上、背後に叔父の作十郎が控えている。)

伝五郎　よし平太郎、おぬしと我と、酒汲み交したこの手に、互に槍と刀を取って立ち向おうとは……。

平太郎　因縁だっ、伝五郎覚悟っ！（刀槍觸れて、兩人の身は軽捷に動く。伝五郎は次第に疲労を増す様子。返り血を浴びて、伝五郎の白面も今は鬼のよう。刃は月に燦めき、兩人の矢声は、あたりの戦闘を静めるほどだ。皆々この二人を取り巻いて、血戦を看視する。その間、お紋は幾度となく飛び出そうとし、仲裁に入ろうと心は焦る様子だが、余りの恐ろしさに、その身は如何とも土堀から離れない。）

お紋　ああ……ああ……ああ……。

（物見台からの矢種は盡きたらしい、と見る一矢、作十郎の肩に刺さる。）

作十郎　あっ……おのれっ！

（手裏剣を投げると、物見台に「あっ」と悲鳴が起こる。一方、平太郎と伝五郎は必死の争い十数合の後、伝五郎、死骸に躓いて倒れるところを、得たりと平太郎が踏み込み、打ち下ろす。その刃の下を、危く掻い潜った伝五郎が、片膝づきに抜き打ちの一刀、平太郎の胴を払って倒す。）

伝五郎　（再び槍を取って）さあ来いっ、何奴も此奴も、冥土の道づれだっ！

（伝五郎の威勢に恐れて、作十郎初め、無事な者、手負いの者など、じりじりと追われ退く。中には一散に逃げ出す者もある。伝五郎、敵を悉く追い払って門前に戻り、槍を杖にほっと安堵の息。極度の疲労のため昏倒する。始終を見ていたお紋は、この時ようやく我に返って、伝五郎に駆け寄る。）

お紋　米倉様！　米倉様！　米倉様！

（抱き上げて、伝五郎は死人のよう）ああ……もう……（伝五郎を離れて平太郎に駆け寄る）内田様！　内田様！　内田様！　ああ……お二人とも……お二人とも……。

（お紋、よよと泣き伏す。その泣き声の静まった頃、門内より伝五郎の母と彦兵衛とが現われる。彦兵衛は頭に繻帯をしている。）

竹 長 吉 正

母 伝五郎や……伝五郎や……。 (駄け寄って身を^{あらた}検め) 気付けを、気付
付けを……。

彦兵衛 は、はい……。

(彦兵衛うろたえて門内に走り入り、間もなく柄杓に水を汲んで来る。

母は伝五郎の口を割って飲ませる。)

母 伝五郎や、伝五郎や……。

伝五郎 うむむ……。

母 気が付きましたか、伝五郎、母ですよ。

伝五郎 おお、母上……敵は……敵は……。

母 お前の武勇に恐れて、皆逃げ去りました。

伝五郎 水……水が欲しい。

(彦兵衛がまた、門内から汲んで来るのを、伝五郎奪うようにして飲む。)

伝五郎 おお、これで漸く^{ようや}人心地ついた。あれほどの人数に囲まれなが
ら、一命を全うしたのは、ふしぎといえふしぎ。これ皆、先祖のご加
護と母上のお蔭でございます。

母 (伝五郎の手足に繃帯を施しながら) ^{なん}何の、何の、お前一人の手柄
です。

伝五郎 さてと、かく多数に人を殺めた^{あや}上は、我々も^{あんかん}安閑としてはおら
れない。今にも役人達が押し寄せ来るであろう。^{なわめ}縄目の恥を受けるより
は、母上、^{いったん}一旦この場を落ち延びましょう。

母 はい、お前の行く所まで、^{しらす}白州の砂利の上でも、^{ごくもんだい}獄門台でも。

伝五郎 かたじけのうござる。では、彦兵衛も。

彦兵衛 ^{とも}お供さして下さいまし。

(三人が行こうとする時、お紋、半身を起こす。失心した^{てい}る態。)

お紋 (手を見て) あっ……血！……血！ (驚いたように立ち上がる。)

伝五郎 (近寄って) おお、お紋、お紋ではないか。

お紋 (月を^{あお}仰ぎ、怖れて) あれ、お月様も……血だらけ……。

伝五郎 お紋、お前も一緒に……。

お紋 （袖を払って）いや！ いや！ おっ^{こわ}恐……お前だね、わたしの
米倉様を……それから内田様を……殺したのは！

母 伝五郎、その女は乱心しています。さ、役人達の来ぬうちに……。

伝五郎 はい……。

（伝五郎、母に促されて、お紋に心を残しながら、^{かみて}上手に入る。お紋、
月を仰ぎながら、ふらふらと歩き出す。）

お紋 （歌うように）お月様あ^{まっか}真赤……斬られて真赤……おっほほほほ
ほ……この世のものは、みんな死んでしまったの。

お月様あ^{まっか}真赤

斬られて^{まっか}真赤

————幕————

[本文校訂上の方針]

1. 旧漢字は新漢字に、また、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
2. 文中、明らかに誤記と判断できるものについては、正式な表記に改めた。
3. 読者の便宜を考慮し、難漢字にはルビを付し、また、平仮名に改めた方が妥当と判断される漢字は平仮名に改めた。

この作品には、何か種本があるのではなかろうか。それがわたくしの直感であった。史光の作品には、童話にしても何か種本があるのは通例なので、まず、このことを考えた。そして、高橋圭一教授（大谷女子大学文学部、日本近世文学）にお尋ねした。高橋教授は近世の実録^(注1)について詳しい方である。この作品「血みどろ月」を読んでもらって判断を仰いだところ、『今古実録 大久保武蔵鑑』という本に入っている「彦左衛門功蹟之記」の中の「旗本内田米倉争論の事」「米倉内田争闘の事」ではないかという回答が得られた。

そして、高橋教授から送られてきた「旗本内田米倉争論の事」「米倉内

田争闘の事」という記事を読んでみた。それはおおむね、次のような話である。

江戸城に登城する前、旗本が集まっている中で、内田平太郎と米倉伝五郎とがいた。内田は四方山の話の折り、「このごろは武術の心がけが疎いので、誰も^{さしもの}差物（戦場で武士が鎧の背などに差した小旗）には気を留める者はいないが、差物は上杉家で好んだ四半がいいぞ。」と言う。「なぜなら、風や雨の時、体を動かすのに障りがなく、また、乱軍の中にあっても進退が自在であるからだ。」と重ねて言う。すると、中に「いや、差物によって武功を^{あらわ}顯すだけではなかろう。それは人々の器量によるのだ。もっとも関東には甲州の^{むか}百足差物というのがあって、敵も味方もそれで道を開いたものだ。」という者がある。内田はそれを聞いて嘲笑い、「なに、百足差物にせよ、また、大蛇の差物でやって来たにしても、おれはびくともしない。また、甲州の^{たけたば}竹束と名づけた頑丈な楯があるそうだが、それさえ弓矢で射抜いてみせるわい。」と居丈高に言う。それを遠くで聞いていたのが、米倉伝五郎。米倉は内田より年下で、しかも、ひ弱な体つきだが、少しも臆せず、次のように言う。

「そもそも、竹束は曾祖父^{たんごのかみ}米倉丹後守が信州攻めの時、刈屋原^{かりやはら}の城主太田弥助が矢継ぎ早に兵をそろえて、向かってくる兵を弓で射立てたのだが、丹後守はとっさに竹束を思いつき、これで矢を防いだ。そして、めでたく刈屋原の城を攻め落としたのだ。それ以来、米倉の竹束といって遠い国々にまで広まった。だが、それは貴殿や我らが生まれる前の出来事だ。今は戦もない静かな世の中であるから、そのような^{からばなし}空談は無用である。」すると内田は高笑いをして、次のように言う。「伝五郎よ。人聞きの好いように先祖の自慢か、そんなものは聞きたくない。おまえの先祖米倉丹後守は、武田家の甘利備前の卑官から成り上がった者ではないか。そのころ、甲州の卑官の小身者は、蓆を織り、草鞋を作っていた。おまえの先祖の丹後は、そうした作業の中で竹束を思い付いたのだ。だが、今の合戦では、竹束のようなものにやられるものはないぞ。」

聞いていた伝五郎は、少しも憤らず、むしろ顔を和らげ、言葉を正して言った、「そもそも、武器の是非について議論するのは無益なことだ。ただ、先祖の始めた竹束のことで言っておきたい。先に述べた信州の刈屋原の城攻めのことだが、信玄公は一手に攻めよと仰せられ、諸子は向かって行ったが、太田の精兵に射立てられた。その時、米倉丹後は城の近くの農家の藪に目を付け、竹を多く切り出した。そして、その竹を士卒の面に押し立たせ、城に近づいた。太田の城からはたくさんの矢が飛んできたが、矢は竹束を通らない。こうしているうちに、甘利の軍勢は城に近づき、ついに攻め落とした。信玄公は大いに喜び、刈屋原の落城はひとえに米倉の竹束の功であると仰せられ、褒美を下賜された。貴殿は甘利の卑官と辱められるが、そもそも、代が変わり、時が移るに従い、出生の高卑は関係がなくなるのが世の常である。歴々の大人物に、その元をたどれば、卑賤の家から出た例もある。ところで、貴殿の内田家に米倉丹後ほど、武名高い人がいるのだろうか。」

このように迫られて平太郎は、「おまえのは法談坊主の弁舌だ。」とののしり、あげくのはては、「口先でなく、立ち合いの勝負をせよ。」と言う。

そして、ある夜、内田は百八十人もの士を率いて、米倉の屋敷へ押し掛ける。もの笑いにされた腹いせである。

米倉の家には、六十を過ぎた老母と伝五郎の弟彦兵衛がいた。母は弓矢をとって二階から射る。米倉の家には他にわずかの士がいて、果敢に戦った。内田方は三、四十人が死に、米倉方は六人が死んだ。内田の士たちは、負けを知って退散した。平太郎は息絶え絶え、加担した仲間の士に助けられ、ほうほうの^{てい}体で逃げ帰った。

内田に加担した士たちは、内談の上、公儀へ訴え裁判となった。しかし、米倉伝五郎は、紀州侯の屋敷に駆け入った。紀州侯は伝五郎を年来、目に懸けていたので、領国にかくまった。公儀から再三、お尋ねがあったが、「行方知れずです」と、すましていた。伝五郎には器量があり、用に立つべき者と判断されたからであろう。

以上が、実録「旗本内田米倉争論の事」「米倉内田争闘の事」の梗概^(注2)である。

これと史光の戯曲「血みどろ月」とを比べると、次のことがわかる。

実録では、内田や米倉の関係が「^{あいばん}兩人相番にて平日^{こころやす}心易き者なるが…」とあり、両者は親しい間柄であったが、特に「義兄弟の約」を結んだりというほどのものではない。しかし、「血みどろ月」ではお紋茶屋に通い、お紋を間に挟んでの三角関係という設定が取られている。そして、この三角関係が内田平太郎の大言壮語で崩れていき、内田と米倉の間で争闘が発生する。特に内田はお紋を伴い京大阪に遁走するという考えたのだが、友人の旗本や叔父の内田作十郎らにそそのかされて、ついに、遁走の計画を中止し、米倉の屋敷に攻め入ることとなる。

したがって、史光はこの実録にお紋をめぐる男同士の争闘というドラマを盛り込み、互いに心安かった武士同士が家名のために戦い、女との恋情を反故にしてしまうというストーリーを作ったのである。

実録には「病は口より入り禍は口より出ると宜なるかな」とあり、内田平太郎が殿中でつい口を滑らして大言壮語したために起きた事件(不祥事)として、この話が位置づけられている。また、実録には「^{さんしーいちげんきゅうし}三思一言九思^{いっこう}一行の古語は、^{いまし}人事日要の誡めなれども、これを忘るる者多し。」という文言もあり、やはり、内田平太郎の失言が大きな災いをもたらした出来事として扱っている。しかし、史光はそうした教訓話を越えて、この素材を武士の恋愛が関係した争闘の話に作り替えたのである。その作り替えの出来栄は、どうであろうか。

わたくしの見るところ、やや尻切れとんぼの感がする。すなわち、最後の場面で、お紋の狂うところがあるわけだが、この先のもっと何かがほしい所である。もしくは、二人の男との間で揺れるお紋の内面の葛藤が、もっと詳しく表現されているとよかったのと思う。さらに、米倉伝五郎という男のふがいなさは、ある程度描かれているが、そのふがいなさが、母やお家のためという名目や義理だてに由来しているのか定かでない。いずれ

にしろ、かわいそうなのはお紋である。お紋という女性に、観客の同情の念が集中するのは明らかであるが、そのお紋が気狂いになって一人悩み続けるというのでは、女性悲劇であり、その悲劇から脱け出す処方箋は示されていない。そこが、この劇（戯曲）の限界である。単なるお涙ちょうだいの戯曲でないだけに、そこが惜しいところである。

ところで、この作品をもっと史光の個人的な事柄に引きつけて解釈すると、どうなるであろうか。史光には長兄の昇三がいた。父の兼次郎は妻（名は、こう）が亡くなったので再婚した。再婚した妻には、連れ子の佐多がいた。兼次郎はこの佐多と昇三を夫婦にしたかったようである。しかし、昇三はいやがり、この縁談は成立しなかった。佐多はかわいそうな女であった。また、縁談を強いられた昇三もかわいそうである。こうした悲劇が当時の農村には少なくなかった。

戯曲「血みどろ月」のお紋の不幸は、当時、史光が住んでいた農村の女性の不幸を下敷きにしているようであり、男二人のそれぞれよりも、男二人の間にはさまって気が狂うお紋に作者の熱い眼は注がれている。

先祖の名誉のためとか、あるいは、武士としての誇りを傷つけられたとか、そのようなことで「無意味とも思える争い」をしている男たちを、横目で見ながら、自分はずっと元気に逞しく生きる、そのような女性像を提出してほしかったが、そこは作者の枯れすすきの感傷（大正時代の浪漫的感傷）に引きずられてしまい、このような作品になってしまった。

弱い、はかなげな女性像である。特に最後の場面、お月さまを見て、お紋が「わけのわからない言葉を吐く」、発狂の場面が、いかにも唐突で、観客はびっくりする。作者の狙い通りだったかもしれないが、もう少し伏線がほしかった。すなわち、ここに至るまでにお紋の悩み苦しむ一途さが何度も出ていたとよかった。

他の人物では、伝五郎の不甲斐なさにがっかりする。彼は父が死に、母との二人暮らしである。しっかり者の母に頭が上らない、いわゆる「マザコン息子」である。おとなしく、優しい男かもしれないが、慕う女の側

からすれば、ずいぶん頼りない。こんな男に惚れたお紋の苦労は目に見える。それなら、少し荒っぽいかもしれないが、豪快で気楽そうな平太郎と結ばれた方がよかったかもしれない。お紋は悩んだことだろう。しかし、平太郎は死に、伝五郎が生き残る。だから、お月さまも泣くわけである。血みどろになったお月さまは、まず、平太郎である。そして、血みどろになったお月さまは、平太郎を失い、さらに、伝五郎を見限ったお紋の心でもある。

この戯曲では、観客は初め、平太郎の傍若無人ぶりや、粗暴な振る舞いに反感を抱き、伝五郎の味方となる。しかし、後半は伝五郎とその母、及びその家来彦兵衛らの振る舞いや言葉にいやらしさを感じ、反感を抱くようになる。観客の心情が、そのように移動することを作者は当然意識して、この戯曲を作ったのである。

このような変化を観客は味わうのだから、戯曲としては、なかなか味のある作品だといえることができる。しかし、初めは平太郎よりも伝五郎の方に引かれていたお紋が、最後の場面でやっと伝五郎の正体を知り、がっくりする。それならば平太郎の方へ靡こうとしても、かんじんの平太郎は死んでいる。どちらにも行かれない。まさに、行き場所を失ったお紋の姿が目に見え。その、やるせない、生きる希望を失ったお紋の姿が目に見え。それなら、初めから他者に頼らず、自立していれば、問題は生じなかったのだと言えば、それまでであるが、この戯曲は、そのような自立を促すものでもない。

けっきょく、この戯曲は、伝五郎の生き方に見られるように、「先祖の名誉のため」などという大義名分を振りかざすわりには、目の前の「哀れな女」一人を救うことができない、そのような武家社会モラルの虚妄性（つじつま合わせ）を批判していると、言えそうである。そして、この武家社会モラルの虚妄性は、霜田史光が生きた昭和初年まで続いていたのである。

戯曲「血みどろ月」の文学史的価値を、わたくしはそのようなものとして考えている。

ところで、この戯曲に「竹束」という軍陣用の楯が登場する。竹束というものをわたくしは具体的に見ていないが、それは矢玉などを避けるため、竹を束ねて一抱えほどにしたものだとし典には記してある。些細なことかもしれないが、この戯曲は米倉伝五郎が先祖（曾祖父）米倉丹後守の竹束に関する自慢話がキーポイントになっている。霜田史光が何故、このような話に着目したかという、その一つにはこの竹束に惹かれたからではないかとわたくしは判断している。

その根拠は、大きく二つある。その一は、史光に「夢の国」と題する童話があるが、その第二章の冒頭に、竹（もしくは竹藪）が出てくる^(注3)。（煩瑣になるので引用はしないが、関心のある方は、その部分を読んでいただきたい。）主人公の少女・久子が夢の中で不思議な国に行ってしまうのだが、彼女が気づいた時、その周りの風景の中に竹林（竹藪）があるという部分である。

もう一つの根拠は、埼玉県郷土史家中村徳吉氏の証言である。中村氏からわたくしが聞いたことは著書『評伝 霜田史光』の中に記しておいたが、そのダイジェストを記すと、次のとおりである。

その頃（＊大正時代の中頃）は（＊沼影や松本新田など）多くの家が竹を栽培していて、竹林の中に集落があるという風景でした。竹材を出荷し、それがこの辺の農家の副業でした^(注4)。

このようなことから判断すると、史光は自分の郷里の風景として「竹」には深いなじみがあった。だから、実録をもとにした講談の中で、とりわけ、この「旗本内田米倉争論の事」「米倉内田争闘の事」に惹かれたのではないだろうか。

ともあれ、わたくしの研究ではこの戯曲「血みどろ月」の基になった実録を明らかにすることはできたが、実録をもとにした講談の話があるはずであり、史光はおそらく、その講談話の方を読んでこの戯曲を作ったもの

竹 長 吉 正

と考えることができる。

「彦左衛門功蹟之記」という実録のことを手がかりとしていうと、大久保彦左衛門に関する講談本の中から見つけたのではなかろうか。ちなみに、この戯曲「血みどろ月」及び実録「旗本内田米倉争論の事」「米倉内田争闘の事」に登場する人物の中に、彦兵衛と称する人物はいるが、彦左衛門は登場しない。彦兵衛と彦左衛門はもちろん、別人物である。しかし、名前はどことなく、似ている。また、実録の方では彦兵衛は米倉伝五郎の老母の弟という設定で、半弓を好むとなっているが、史光の戯曲では彦兵衛は米倉伝五郎の家に仕える老人（七十三才）で、半弓を好むと設定されている。史光の戯曲では米倉伝五郎の母は「六十二、三才」と設定されている。要するに、史光の戯曲では彦兵衛が伝五郎の母より年老いているという設定である。いずれにしても、この彦兵衛という人物が、「大久保彦左衛門ならぬ大久保彦左衛門」（じっさいの大久保彦左衛門ではないが彼に似た人物）として機能しているのではないだろうか。それが、わたくしの見方である。

(9) 史光の戯曲作品リスト及び雑誌『真砂』^{まさご}掲載作品リスト

霜田史光の戯曲作品リストを掲げると、次のようになる。

「三人漁師の子」（＊童謡劇）『芸術教育』大正12年7月

「油屋与兵衛の夢」『真砂』第2年第11号 大正13年11月

「未来の女」（＊抒情劇）『真砂』大正14年3月、4月（全2回）

また、雑誌『真砂』掲載作品リスト（＊戯曲作品を除く）を掲げると、次のようになる。

詩「夜の虫」2年9号 大正13年9月

詩「恋の幽霊」2年12号 大正13年12月

詩「廃都」3年6号 大正14年6月

詩「どよめき」4年2号 大正15年2月

随筆「僕の文学青年時代」4年3号 大正15年3月

ここで『真砂』という雑誌（*写真②a②b）について、少し記しておく。
わたくしが『真砂』の存在を知ったのは、乙骨明夫氏の論考「民謡詩人
霜田史光」（『国文白百合』第17号 1986年3月）である。この中で、乙骨
氏は『真砂』に掲載された霜田史光の幾つかの作品を紹介していた。わたく
しはそれまで『真砂』という雑誌の存在を知らなかったのが驚くと同時
に、それをぜひ見てみたいと思った。それから、しばらく時間が過ぎて、
わたくしはある古書店の目録で見つけることができ、やっとそれを
手にしてみることができた。

その後、日本近代文学館編『日本近代文学大事典 第五巻＝新聞・雑誌』（講談社 昭和52年11月）で「真砂」（執筆・栗坪良樹）の項目を見つけた。



写真②a



写真②b

栗坪氏の記述を尊重しながら、わたくしの記述を加えて解説すると、次のようになる。

雑誌『真砂』は一般人の投稿を主とした文芸雑誌である。発行所は真砂社、その住所は東京市本郷区春木町3丁目6番地。これは発行者小野田益三の住所。つまり、自宅を『真砂』の発行所としている。創刊は大正12年（一九二三）であるのは確かであるが、何月かが分からない。大正12年9月に関東大震災が起こるから、それ以前であろう。わたくしが見た最初の号は第2年第1号（大正13年1月）で、その編集雑記に編集・発行者の小野田益三（号は南茗^{なんめい}）が「震災のために打ちのめされた」と書いているから、創刊後、ほどなく大震災に遭遇したと考えることができる。

終刊は大正15年（一九二六）11月である。第2年次（大正13年）の前半は編集者の小野田が早稲田大学の英文科出身であることから、早稲田大学英文科関係の尾島庄太郎（＊雑誌では尾島晶太郎）、中山義秀（＊雑誌では中山議秀）らが執筆し、同年次の後半からは白鳥省吾・福田正夫・百田宗治ら民衆詩派の詩人が作品を発表する。白鳥省吾はやはり早稲田大学英文科の出身であったから、小野田との関係が深かったであろう。そして、霜田史光は民衆詩派の詩人というのでもなかったが、白鳥省吾とのつながり、また、小野田と近い所に住んでいた^(注5)などの関係で、『真砂』には詩をはじめとして、戯曲・随筆など、比較的多くの作品を発表している。

『真砂』は当時、盛んになりつつあった一般市民の文芸創作熱を吸い上げる形で創刊された雑誌であるが、編集者としてはまず、雑誌としての格を上げるため、「大家」はともかくとして、「中堅作家・詩人」の寄稿を求めた。そうした編集意図に基づき、白鳥省吾・福田正夫・百田宗治、そして、霜田史光らが『真砂』に登場したのである。それは誌面の編集の仕方によく表れている。具体的には、客員としての彼らの詩原稿は活字では大きく一段に組まれているが、他の投稿者の作品は二段、もしくは三段に組まれている。さらに、これは推測でしかないが、客員としての執筆者には原稿料が支払われたのではないだろうか。それであれば、彼らとて、こ

んなにたびたび原稿を書かなかったであろう。

しかし、『真砂』はだんだん、力を失っていく。大正時代の終焉とともに文芸熱が後退していったというのではない。大正時代の末から昭和時代の初めにかけて、いろんな文芸雑誌が出てきて、このような投稿雑誌の競争が激化していったのである。雑誌の判型を菊判から菊半の判型に変えていく。小野田は菊判の『真砂』を第4年第11号（大正15年11月）で一応閉じる。しかし、その前の大正15年2月から『真砂』のほかに、菊半の小雑誌『ささやき』を第1年第1号（大正15年2月）第1年第2号（大正15年3月）と発行している。『ささやき』は『真砂』の姉妹誌と位置づけているが、その中身は投稿作品で占められており、「中堅」「大家」の執筆がなく、ほとんど投稿者の発表意欲を満たすもので、今日評価するに値する作品を見つけるのは困難である。

昭和時代に入って小野田は二種類の単行本形式の発行を考え、実行する。一つは160ページから260ページの間の厚さの文芸作品選集である。これは『文芸真砂第一編 一番鶏は鳴く』（昭和2年3月 全258ページ）『文芸真砂第二編 新緑を呼ぶ』（昭和2年7月 全162ページ）『文芸真砂第三編 地表の秋』（昭和3年1月 全160ページ）の3冊を刊行した。もう一つは50ページから80ページの間の厚さの文芸作品選集である。これは『真砂叢書一 緑陰』（昭和2年7月 全78ページ）『真砂叢書二 秋の表情』（昭和2年11月 全52ページ）の2冊を刊行した。判型は『文芸真砂』『真砂叢書』ともに菊半である。こうして、大正12年（一九二三）から始まった小野田益三の文芸雑誌の編集・発行者としての仕事は、昭和3年（一九二八）で、いちおう終結する。

霜田史光は昭和3年（一九二八）、まだ死んではないが、貧窮の苦しい生活を送っていた。その時、白鳥省吾や小野田益三が雑誌『真砂』を介して救いの手を差し伸べてくれたというのは、当時の文士（小説家・詩人）仲間の厚い志をうかがわせる美談といえる。

(10) 童話「額を打たれた西行法師」の典拠と人物名の訂正

霜田史光の童話「額を打たれた西行法師」は、『金の星』大正13年2月号に発表された。この作品は拙著『霜田史光——作品と研究——』（和泉書院 2003年11月）に収録したので、比較的容易に読むことができる。

この作品「額を打たれた西行法師」は、布教奨学研究会の著書『仏教史談 西行法師』（森江書店 明治43年6月＊写真③）の「第三席 天竜川」に載っている逸話と、ほぼ同様である。

また、西行法師に関する話は、昔から多く伝わっている。鎌倉時代の中期から伝わっている「西行一生涯草紙」というものがあり、それを基にして正保三年（1646）版の流布本「西行物語」がある。他に、「西行物語絵巻」という絵巻物もある。

高橋貞一の編になる『文芸文庫 西行物語』（勉誠社＊日本古典文学8昭和58年4月）に収められている「西行一生涯草紙」「西行物語」をみると、確かに、この天竜川での逸話が載っている。しかし、その記述はきわめて簡潔である。しかも、西行と共にいた法師は、「西行一生涯草紙」「西行物語」いずれも、「共に具したる入道」（「西行一生涯草紙」）「供なりける入道」（「西行物語」）としてあり、その名は具体的に記されていない。

しかし、『仏教史談 西行法師』では、西行の供をした法師の名は「西往（さいわう＊旧仮名遣い）」と、はっきり記されている。

霜田史光の童話作品「額を打たれた西行法師」をわたくしが見た『金



写真③

の星』大正13年2月号では、その法師の名は「西住（さいぢゅう）」と記されていた。それゆえ、現代表記にする時、「西住（さいじゅう）」とした。

史光の原稿がどうであったか詳らかにしないが、西行の従者に実在の人物として「西往（さいおう＊現代仮名遣い）」がいたとするなら、ここはやはり、「西住（さいじゅう）」でなく、「西往（さいおう）」と改めるべきである。

注

- (1) 実録は実録物、実録本、実録体小説ともいう。江戸時代の読物の一つ。多くは講談の丸本を整理したものであり、事実に空想を交えて実際の記録のような体裁に作ったもの。評定物（訴訟に関する相談・会議・議決）・仇討物・裁き物・出世武勇伝・白浪物（盗賊を主人公とする）・任侠物（任侠を旨として渡世する人々、男伊達）などに分けられる。出世武勇伝としての「真書 太閤記」、裁き物としての「大岡政談」などが有名。
- (2) 「旗本内田米倉争論の事」と「米倉内田争闘の事」は、話の長短に差はあるが、話の中身はほぼ同じである。よって、ここでは米倉内田争論（争闘）の話と一括して梗概を記した。
- (3) 霜田史光「夢の国」『金の船』大正11年3月、4月。拙著『霜田史光——作品と研究——』（和泉書院 2003年11月）所収。
- (4) 中村徳吉の談話 拙著『評伝 霜田史光』（日本図書センター 2003年9月）124ページ参照。
- (5) 『真砂』の編集・発行者である小野田益三の住所は東京市本郷区春木町3丁目6番地。白鳥省吾の住所は昭和3年の詩人協会編『詩人年鑑 1928』（アルス 昭和3年6月）所収「詩人住所録」に「東京府高田町雑司ヶ谷亀原六一」、また、霜田史光の住所は同前『詩人年鑑 1928』『詩人住所録』に「東京府高田町雑司ヶ谷亀原五九」とある。白鳥・霜田と小野田との間には幾らか隔たりはあるが、白鳥と霜田はまったく、目と鼻の間とも言えるような近くに住んでいたのである。詩人同士の仲間意識から白鳥が小野田に史光を紹介したと考えることができる。また、霜田史光は詩史のこれまでの通説からすれば、いわゆる「民衆詩派」の詩人ではないが、当時の「新民謡」など、民衆と詩を近づける考えを強く持っており、さらに、そのための運動なども起こしていたので、白鳥省吾、福田正夫、百田宗治らと近い詩観の持ち主であったと言える。

竹 長 吉 正

添付写真

写真① a ① b 「血みどろ月」の原稿

② a ② b 『真砂』という雑誌

③ 『仏教史談 西行法師』（森江書店 明治43年6月）

（本学教育学部教授）